

《れんさい》

労務者の歴史 ☆ 明治土方編 ☆ 番外

## 沓掛時次郎と土工

『沓掛の母』、『沓掛時次郎』など数多くの名作を生んだ作家、長谷川伸が土工をしていたことを知つてゐる人は少ないだろう。

街の道 泥にまみれた 土工の群に  
昔あはれな われを見る

作家長谷川伸が年老いてから作つた歌に彼の土工時代への考え方があらわれているように、彼は土工をあまり好ましく思つていなかったのかもしれない。だから作品の中にも直接土工を主人公にしたものはほとんどない。しかし、旅人の博徒を主人公として書かれた『沓掛時次郎』のモデルは「土工の徳」なモデルだと作者もいつている。

中とびらに引用された『飛びっちょ』は、

その数少ない土工が主人公の芝居である。明治末期の土工の現像を舞台とし、土を運ぶ土舟船に逃げこんだ娘と、それを追う兄、人買人と土工、飛びっちょの吉。との争いを描き、吉が、人買人を実力で追い出し、また飛びっちょとしていく所で終りとなる。

舞台設置にも彼の経験があらわれている。——崩壊させた岩をモッコに挿さ込む土工がある。モッコに小棒を入れて、前棒と後棒の二人で担ぐ土工がある。この二人は陸地から船へわたしたアユビ（歩み板）を渡り船の枠の中にモッコをあける、小棒、モッコの扱い歩き方に土工独自のものがある。たとえば鍬の如きも農作用乃至園芸用の物ではなく、九寸に六寸の鍬へ九六鍬というから出た土工用の鍬でなくてはならない如くに。

長谷川伸は明治一七年に横浜で駿河屋とい

う新負師の家に次男として生まれた。

明治と同時に田舎から出てきた一代目が赤  
字工事を請け負ったことから駿河屋は没落し、  
二代目は遊びで財産をくいつぶし、伸の母は  
俸が四つの時に実家に帰ってしまい、以後行  
方が知れなくなつた。この母を慕う気持ちが名  
作「腰の母」となつた。

伸の兄は幼くして丁種彦公に出され、伸は  
蛇々と職をかえていった。

——父が下請負人らしくなるまでの間に、  
新工へ長谷川伸の幼い頃の通称「は動く口  
をいろいろ変えました、脚が太く、ふくら  
はぎに昔の人力車夫とおなじような筋が、  
何足もの蚯蚓みづかのように出ているのは、その  
当時から尾をひいたモノだろうと思います、  
その代り腰は据つています。今はひどい非  
力ですが、年少のころから人並みに力があ  
つたし、勾配も早かつた、コヤへ弊の直退  
も軽かつたから、小粋一本も。この一枚の

少し長くなるが「飛びッちょ」のモデルと  
なつた男の事も勉強になるので読んで引用し  
てみよう。

——匠次は伊勢の者で土工の親分です。若  
いときから菅笠い蓋をいただけ、仕事着の  
手袖半纏に、引ッ張りの印半纏と股掛け手  
甲脚絆に草鞋穿き、小風呂敷包一ツもたず、  
日本の半分ぐらゐは渡り歩いた末に親分に  
なつたのだそうです。そうした諸国遍歴の  
土工旅を西行とも飛びッちょともいい、  
には黒鉄渡世の修行旅なぞという者もあつ  
た。西行とは西行法師からとつたもので、  
諸国廻りをするから云うのだでしょう、飛び  
ッちょというのは渡り鳥が仮りの堀ほりにつき、  
又も飛去つてゆくのを取つて云つたもので  
しょう。新工は西行に出たことがないので、  
本当の飛びッちょの味は知らないが、出た  
としたら曲りなりにもやれたに違いありま  
せん。

称えて一枚一本といった土工のワザも、コ  
ンクリート練りの角シャベルを使う切返し  
でも、人並み以下ということはなかつた。  
現場小僧のとき、いたすら半分によつたこ  
ともあるので、スアの素人より速く一人前  
になつたのでしよう。土工より蔵人足の方  
がよいので、それにもなつた、足代の上で  
脚を籠もも丁ちやう形かたにして、杉丸太をウラウラ（完）  
からモトへ末へ手繰り、腕うで詰めにして水  
平にすることも、腰にさげた髻むすしい切り繩  
で、丸太と丸太とを結ぶことも、ますどつ  
やら出来た、それも現場小僧だつたからで  
しょう、だが、年期が本式にはいつていな  
いので、実際は未熟なもので大工でいえぬ  
「手切り摩羅出し釘こぼし」の程度だつた  
に違いない。修行がないのと前合あひあいが違ちがう  
ので、新工は本物の蔵の者には様ようのなない、  
土手組の配下でした。

——ある市井の徒ら（昭和二六年）より  
西行は帳簿ちやうぼといいい慣なわした土木工事の理  
摩が、どこにあるかをすぐ知ることが出来  
た、同業の土工に聞けば三里五里先のこと  
は勿論、十里二十里先のことでも、問われ  
れば知つてゐるだけは教えるのが当然の美  
稱だつたのです。遠近の飯場のあり方を、  
西行が飛びッちょをして、通信報告をやる  
から、どこの埋立工事は竣工引渡しがアト  
幾日ぐらゐとか、どこの切通し道路は後日  
ぐらゐの後に敷入れがあるとか、馬鹿でな  
い限り見てきたように土工は知つています、  
だから、西行は帳簿を見付けるのに骨を折  
ることはない。何里四方どこにも帳簿がな  
く、安宿に泊る錢もないときは、土工に縁  
前のある様業を尋ねて、草鞋紐を請つて返  
ぎを付けることもあるが、西行の名前には  
ならぬからあまりやりたがりません。帳  
簿を見付かると、仕事中は怠おこして控えて  
待ち、昼飯か小食こじきのとき、適当にだれかを  
見つけに錢をつけます——に錢といふの頃

からかいつて通用しているが、訛らぬ限り、ジンジでなくジギで、字を当てる時、佛を自己紹介のはいつた挨拶なのだから、仁義ではどうしたつて意味がなく、明らかに辞儀だが、与曾我物語のような古い音の本にも、辞儀と当然あるべきところに仁義と宛あてているから、誤り用いたのは古く、幕末や明治ではない、そうしてこれは博徒專用の言葉などではなかつた——と、先方は辞儀を受ける、受けたものが紹介者になつて親分に執り成しする、人手が過剰だつたり、親分が厭な奴だと思ひ、そして時刻が、夕方までに二里なり三里なり歩いてゆけるときだつたら、草鞋錢をやつて発たせ、時刻が泊り時刻だつたら、好き不喜歡人手の多い少いを頼にあけて、一宿一飯のつきあいさやる。……

西行の方でも菅笠を伏せておけば一宿の所望なのだし、菅笠を返しておけば草鞋錢の所望ということにきまつていた。

これらは、長谷川伸が二十才頃の事だといふから、明治三十七年頃のことだと思われる。伸は家が貧しかつたので、学校もいけず、わずかすかに十六頃、夜学に少しかよつたぐらいで、字もほとんど独学で覚えたといつている。そのため、日記をフける事はもちろん物を書くことすら出来なかつたので、多くの話を聞きながら、忘れてしまつた。「その話を忘れずにいたら、明治土工かたせき氣負の一半の一半ぐらゐを伝えられたらうものさ」と後で云つてゐるが、本当にその通りだと思ふ。

わたり者でも 人情はあれど 泣くにや  
この目が慣れ過ぎた

——『白夜低唱』(昭和八年)より

(労働者の歴史調査会・土方渡)

